

若手教員と語る・教育現場の現在と課題

—分科会の報告および得られた成果と今後の課題の検討—

<第7分科会>

遠藤 拓馬（千葉市立千城台西中学校）
中里 一貴（藤岡市立北中学校）
早川 晃央（射水市立小杉南中学校）
山口 夏樹（桜華女学院中学校・日体桜華高等学校）
新井 孝和（埼玉県立上尾南高等学校）
木村 愛美（千代田区立神田一橋中学校）
高橋 靖之（明治大学教育会会長）
飯塚 和幸（明治大学附属中野中学・高等学校）
伊藤 直樹（明治大学文学部）
伊藤 貴昭（明治大学文学部）

はじめに

第7分科会は、明治大学教職課程常設分科会として設定された。

明治大学では、毎年400～500名の教員免許状取得者がおり、そのうち100名前後が教育現場で働くことを希望している。そして、明治大学教職課程は、毎年、全国集計で百数十人に上る公立学校名簿搭載者（合格者・但し採用の現実には既卒者採用が7割ほど）や、私立学校への合格者を輩出している。

そのため、本分科会で、教職希望の学生と、新採用又は、採用されてから2～3年の若手教員が交流する場を設定し、広く情報交換を計り、同時に若手教員が直面する教育現場の課題をどのようにして乗り越え、教職経験智を深めて明日へ臨んでいくか、或いは、それと表裏の関係になる「やりがい」等、率直な意見交換を目指した。

具体的には、教科指導・生活指導・特別支援・部活動指導等々を、パネル討論形式で進めた。分科会は以下のように2つに分け、問題点の掘り下げをはかった。

Aグループ（教職経験3年程度）

司会：高橋靖之（明治大学教育会会長）・飯塚和幸（明治大学附属中野中学・高等学校）

パネリスト：中里一貴（藤岡市立北中学校）

早川晃央（射水市立小杉南中学校）

遠藤拓馬（千葉市立千城台西中学校）

Bグループ（初任者・特別支援）

司会：伊藤貴昭（明治大学文学部）・伊藤直樹（明治大学文学部）

パネリスト：山口夏樹（桜華女学院中学校・日体桜華高等学校）

新井孝和（埼玉県立上尾南高等学校）

木村愛美（千代田区立神田一橋中学校）

以下に、5人のパネリストの先生方の感想や現在取り組んでいる課題等を掲載する。

思うこと

中里 一貴（藤岡市立北中学校）

はじめに

2014年に政治経済学部卒業後、地元の群馬県で教員生活が始まった。慌ただしく一年が過ぎようとした時、ふと見た明治大学のホームページで、明治大学教育会会長の名に高橋靖之先生を見つけ、また初任者研修が終了したことを報告することを兼ねて高橋先生に連絡したところ、後日パネリストの話をいただいた。若手の教員には中々こういった機会がないこと、何より久しぶりに大学に行きたい、ということから是非参加させていただこうと思った。分科会の話を中心に、2年弱のキャリアで何を感じ、何を思うか、書いていこうと思う。

また、このような発表の場を設けていただいた先生方、明治大学に大変感謝している。

生徒

学校の状態が比較的落ち着いていることもあって、生徒に特別に気を遣うことはあまりなく、比較的自然体で接していられている。もちろん、色んな生徒がいるわけで、一筋縄ではいかないと感じることもある。幸か不幸か、懐いてくれているような生徒もいて、私を支えているのはそういう生徒だったりするのかな、と最近思っている。

教員

生徒同様、教員も様々である。ある生徒にとっては、とんでもない先生でも、ある生徒にとってはお気に入りの先生だったりする。

「生徒は教師の指導の姿」とある先生は言う。関わっている教師が何を伝えて、どんな生き様を見せているのかが、生徒を見ていればわかるという。

またある先生は「何が良いかは、わからない」と言う。人の考えは様々だから、自分にとっての「正しい」が周りの人にとっての「正しい」とは限らないということだ。年が経つにつれて、考えが凝り固まってしまう人になるよりも、柔軟性を持ちながら自分の考えを持てる人が良いと思う。

思うこと

群馬で教員をやっていると思うのは、教育学部を出ずに教員をしている人は少ないということだ。もっと言えば、明治大学出身者はいない。いるのだろうが、会ったことがない。ほぼ地元の国立大学の教育学部出身者である。様々な地域から人が集まる都心に比べると少し閉鎖的なものかもしれない。良い悪いは別として。

そういう意味では、年に一回明治大学に集まれる機会として、この明治大学教育会があることは地方にいる者としてはありがたい。

3年目を迎えようとしている今、とにかく与えられた環境で一生懸命やるしかないのかな、と思う。先輩方も非常に良くしてくれるし、持ちたい部活を持たせてもらっている。どんな状況でも考え方、捉え方で過ごし方が変わってくる。

偉そうに書いてきたが、こんなことを今一人の若手教員は思っている。

明治大学教育会・第七分科会まとめ

早川 晃央（射水市立小杉南中学校）

教員になった動機又は理由

明治大学に入学した当初から選択肢の一つとして教員を考えていた。その背景には、身近な職として、教員しか知らなかったことが大きい。

教職に就くか就職活動をするか悩んでいた時期に、私の背中を押したのは、三年次に齋藤孝先生の教職特論を受講したことだ。杉並学院中学校での授業の体験等を通して、子どもとふれ合うことに生き生きしている自分がいることに気付いた。それが教員を志したきっかけである。

教科指導（社会科）について

社会科の授業は時間との戦いである。決められた授業数で教科書の内容を終わらせることは難しい。生徒が自ら気付く、考える授業として、調べ学習や討論型の授業を中心に行いたいと考えているが、毎年4月と11月の中教研学力調査や実力テスト、ひいては入試を意識すると単元に一つそのような活動を組み込むことで精一杯だ。これでも近隣の中学校の先生と進度を確認すると私の進度は遅い。

また、生徒には高校入学をゴールと考えてほしくない。そのために時事問題をなるべく多く扱いたいと考えており、定期考査では、時事問題を数問出題したり、長期休みには新聞のスクラップを宿題として提出させたりしている。そして長期休み明けには、生徒一人一人が集めた記事で発表したり、私の気になったニュースを紹介したりしている。このような活動を充実させるためにも、日々の授業内容を精選し、より密度の濃い授業をしたいと考えている。

生徒指導について

今年度は、昨年度から持ち上がった2学年の担任として、学級運営に特に力を注いだ。この学年は、学習に対して前向きな気持ちをもっているが、友達同士では、ささいなからかいやSNSを用いた悪ふざけからトラブルに発展することがあった。

そのような背景から積極的生徒指導を心がけ、道徳の授業では、生徒が道徳的实践力、自己有用感を高められるよう資料を工夫して行った。これまで、副読本を主として道徳をしていたが、4月に学級の生徒を対象に行ったアンケートでは、道徳の授業が好きではないと答える生徒が約半数いた。その理由としてもっとも多い回答は「副読本の話がつまらない」である。それが、資料を工夫して、生徒の心に響く道徳を目指したきっかけである。

以下に今年度行った道徳の授業の一部を抜粋して挙げる。

実施月	資料	価値（徳目）
4月	トイレの神様(植村花菜)	勤労奉仕 4-(5)
5月	G I F T (Mr.Children)	個性の伸長 1-(5)
6月	「なぜ人を殺してはいけないのか」	公正・公平 4-(3)
7月	Xからの手紙	思いやり（認め合い） 2-(2)
9月	仲間(ケツメイシ)	集団生活の向上 4-(4)
10月	円周率～山井投手の思い～	理想の実現 1-(4)
11月	iPhone18 の約束	家族愛・ネットモラル 4-(6)
12月	Xからの手紙	思いやり（認め合い） 2-(2)
1月	食べられた切符	法やきまりを守る 4-(1)
2月	夕陽を見ているか？(AKB48)	自然愛 3-(2)
3月	Xからの手紙	思いやり（認め合い） 2-(2)

年に10回程度、資料として、J-POPを用いた。普段何気なく聞いている曲を資料に用いることで、生徒は感情移入がしやすく、道徳の授業は生徒の評判がよい。生徒に行った学期末の振り返りアンケートでは、深く考えることができた実践の上位を占めた。その他の実践もノンフィクションの資料にこだわることで、より登場人物の気持ちになって考えられるようになったようである。

また、道徳の授業の中で、生徒同士が意見を交流する場面を多く設定することで、生徒の自己有用感が高まった。7月末と12月末に行った「あなたはクラスの中で必要とされていると感じますか」というアンケートでは、5段階評価で、学級平均は7月が2.7だったが、12月では、3.6となり、ほとんどの生徒が7月に比べ高まった。これはQ-U調査からも同様のことが言える。6月と11月の2度の調査で、学級全体として学級生活満足群に入る生徒は66%から75%となった。また、個の変化として、11月の調査で新たに学級満足群に入った生徒は、「最初はあまり、クラスが好きじゃなかったけど今はけっこう好き」、また、別の生徒は、「ちょっとしたことであまり変わらないと思っていたけど、そのちょ

っとのことがんばることで大きな変化になると知って、ちょっとしたことでもがんばるようになった」とそれぞれ答えている。このように、これらの取組を通して、自己の成長を実感できるようになったことが分かった。

今年度、道德の授業を改善することで、日々の学校生活にそれが生かされていくことを実感し、様々な場面で生徒の真剣に頑張る姿を見ることができた。生徒の成長が目に見えて分かり、居心地のよい学級となることが分かった。そして、今まで以上に頑張りたいと思うようになった。

今後も、よりよい学級となるような実践を積み重ね、生徒が「このクラスでよかった」と思えるよう、また、生徒と共に成長できるよう学び続ける教師でありたい。

明治大学 教育会 第7分科会を終えて

山口 夏樹（桜華女学院中学校・日体桜華高等学校）

私は、本学農学部生命科学科を2014年3月に卒業し、縁あって4月より1年間、本学資格課程生田分室に勤務していた。今年度より、夢であった教員生活をスタートさせた。

分科会を振り返り

教員1年目である私は、教員になって強く感じた「教師に必要な要素・学生のうちにしておくべき事・教師になってよかった事」について発表した。その内容を選んだ理由は2つある。まず1つ目に、私自身学生の頃より知りたかった、もしくは気になっていたことを伝えたかったからである。そして2つ目に、現役の学生に教師の魅力だけではなく苦悩も知ってもらい、真剣に教師について考えてほしかったからである。

・教師に必要な要素

「奉仕心・誰にでも等しく接する事・面白い」を挙げた。自身の時間を削り、部活動、授業準備や学級経営を行う奉仕心。注意の仕方や接し方によって最良と見られない構え。そして、面白さや人間的魅力によるキャラクターづくり。これらは、数ヶ月教員として仕事をしたうえで特に痛感したことである。

・学生のうちにしておくべき事

教育実習に行く前の自身の不安や心配している事をもとに話した。「教科に対する知識・何かひとつでも他人に負けない事をもつ・コミュニケーション能力・体調管理・人生のネタ帳の準備」を挙げた。教育実習は、教員免許を取得するうえで最大の関門であると考え、2,3週間、生の中高生に触れるチャンスであり、関わる責任の大きさを知ってほしかった。

・教師になってよかった事

「生徒と喜びを分かち合えたとき・同じ日が1日もない事・進路を決めたとき・生徒

の違う一面をみられたとき・卒業式」を挙げた。辛いと思う事もあるが、1 年目の私ですら前に挙げたこと以外にも数多くよかったと感じる場面がある。そう感じる事が、日々私が教壇に立つ原動力となっている。

学生の前に立ってみて

私は、この分科会の 1 番手で発表した。学生たちは、いつもの講義とは違う雰囲気戸惑い緊張しているように見受けられた。私もまた、1 年目の若輩者が偉そうに講義することに緊張していた。しかし、講義をはじめると学生は、笑っていたり、深く頷いていたり、深刻そうな顔をしていたりと私を安心させてくれた。講義後に、多くの学生が疑問や気になることを質問にきて、列になっていた。質問の中には、「なぜ私学の教員になったのか」「公立の採用試験は受けたのか、また勉強開始時期や内容」「教員の勤務形態について」「就職活動もしていたのか」等があった。その質問を聞いて、今後またこのような機会があれば発表内容に組み込みたい。興味を抱いてくれる学生が多く、嬉しく思った。私は、この講義を経て自身を見つめ、初心を思い出し今後の教員生活において、聞く立場をより理解しニーズに応えられるよう活かそうと思えた。

最後に

このような機会を与えて下さった先生方、運営して下さい事務員の方、そして聴講して下さい学生の方に深く感謝申し上げます。

この 1 年間を振り返って

新井 孝和（埼玉県立上尾南高等学校）

昨年 4 月 1 日、私は正式に埼玉県の教諭となった。これから 30 数年間この仕事を続けていくのだと自分に言い聞かせた。この 1 年間を振り返って、この場で報告できるようなものは何もない。まだまだ教師としては「未熟者」だからである。ここでは報告というよりむしろ、この 1 年間で感じたこと、考えたことを列挙していきたいと思う。

私は今年度教諭となったが、この 1 年間は兎にも角にも「変化」の年であった。私は地理歴史科の教諭として採用され、勤務校での校務分掌は教務部、人権教育委員会、部活動は男子ソフトテニス部の正顧問であった。4 月当初から戸惑いの連続であり、慣れないことばかりであった。心が折れそうなこと、不甲斐ないと感じたことは沢山あった。しかし、その度に生徒に励まされていたように思う。生徒が懸命に努力している姿や、変わろうとしている姿を見ると、「俺も頑張らなければ」と思うのである。

今年 1 年間は法定研修である初任者研修を受講した。その研修の中で、ある先生が「教師は五者である」という言葉を述べていた。教師は学者であり、役者であり、芸者であり、

易者であり、医者であるというのである。教師は生徒に対して様々な役割を良い意味で「演じ」なければならないということである。この言葉から、我々教師は人格の形成者として、全人格で生徒と向き合わなければならないのだと私は思う。授業や生徒指導、部活動など様々な形で生徒に向き合っていると生徒の意外な一面が見えてくることがある。授業中全然集中していない生徒が、部活動になると目の色を変えて、真面目に取り組んでいたりするのである。その彼にとっては部活動があるから学校に来ているのかもしれない。ここで生徒に対して「勉強頑張れ」と声を掛けるのではなく、「おまえ部活頑張ってるな」と私は声を掛けるようにしている。教師は様々な「役」を演じなければならないのと同時に、生徒を見る様々な「目」を持たなくてはならない。この1年間を振り返って私はこの事を肝に銘じている。

11月に母校である明治大学で話をさせて頂く機会を頂いたが、まだまだ未熟者の私が学生に話せることはないと今でも本心から思っている。そのためここにはこの1年間で感じたことや考えたことなどを書いた。この文章を読んでいる学生がもしいたら、「人間でなければ人間は教えられない」ということを最後に伝えたい。私は教育にハウツーはないと思う。社会人になる前に色々な物を見て、聴いて、感じて欲しい。そして色々な人と出会い、色々なことを話して欲しい。人間としての温かみを持って欲しい。教員の向き不向きよりもこのことを大事にしてもらいたい。

通級指導学級での経験から

木村 愛美（千代田区立神田一橋中学校）

わたしは、2013年11月から、産休・育休代替として千代田区立神田一橋中学校の通級指導学級（情緒しょうがい）で勤務している。通級指導学級とは、以下のような生徒のための特別支援学級である。

- ・「聞く・話す・読む・計算する・推論する」などに困難がある。
- ・通常学級での学習だけでは、理解が困難である。
- ・対人関係が築きにくい、場面や状況に応じた行動が難しい。集団生活になじみにくい。

現在、神田一橋中学校の通級には、上記の基準に該当する生徒が数名いる。こうした生徒には、以下の指導を行っている。

- ・週に8時間以内で、在籍しているクラスの授業を抜けさせて、生徒の苦手とすることを学習する。
- ・生徒一人ひとりに応じたプログラムを作成し、それに基づいて、個別・小集団指導する。

- ・自立活動（情緒を安定させる力、変化に対応する力、他者とのコミュニケーションをとる力、自らの課題を理解して課題を克服する力などを養う）
- ・自立活動に関連付けて、学習の補充を行う（国数英）

通級指導学級は、少しずつ存在は知られてきているものの、まだまだ知名度は低く、現場で働いている通常学級の教員でも、自分の担当する学級の生徒が通級でどのような指導を受けているのか分からないことがある。わたしは、この職に就くまで、大学院の博士課程でずっと日本文学を研究していた。社会教育や生涯学習にも興味があり、国立市公民館で知的しょうがいを持つ人々とかかわっていたため、しょうがい者と共に学ぶ経験はしてきたものの、「教員として指導する」ということに関しては、何も分からない状態からスタートすることになった。

まず、わたしがぶつかった壁は、「通級に来ると、授業が分からなくなるから、来たくない」という「通級渋り」をする生徒がいることだった。そこで、本人の意思を汲み、通級を一時的に休止することになった。しかし、本生徒の学年が上がるごとに、授業についていけなくなり、ほとんどの時間を寝て過ごす、それを注意すると暴言をはく、等の問題が起きるようになった。

わたしは、通級で何をしてよいのか分からなくなった。「この生徒たちにとって、本当に必要なことは何か？」という疑問を解決するために、本を読んだり、研修に出たりすることで、発達しょうがいに対する理解を深めた。夏季休業中には、東京都が設けた研修に片っ端から参加した。そして、実際に発達しょうがいや情緒しょうがいを持つ生徒たちの進路先を見学しに行った。しょうがい自体を理解し、しょうがいを持つ生徒たちが将来どのような困難に立ち向かうかを知ること、中学校3年間で何を指導すべきか考えた

わたしが辿り着いた答えは、文部科学省が示した「義務教育の目的、目標」です。「義務教育の目的、目標は、高度に発達した複雑な現代社会において、生涯を人間として、とにもかくにも生きていけるだけの資質能力を体得させること」というものである。例えば、分からないことを誰かに尋ねることができる。友人とコミュニケーションをとることができる。新聞や公的な書類などの文章が読める。片づけや身の回りのことを自分でできるようにする、などである。

通級の生徒たちは、しょうがい者手帳を取得することができず、健常者と同じ土俵で生きていかなくてはならない。社会に出たときに、最低限のことができていれば、何とか自立して生きていける。しかし、それは、生徒が「自分は今、がんばっている！」と感じながら学習していかなければ続かない。がんばったことが目に見える形で報われるようにさせながら、力をつけさせたい。「やれば、やっただけ、何かが残る」ということを経験させたい。こうした指導に対する考え方が、わたしが通級の生徒を指導するにあたって得たことである。

わたしの産休・育休代替としての勤務期間は、今年度までである。今後は、中学校や高校で講師として、国語を教える機会があるかもしれない。通級指導学級とはまったく違う環境であるが、ここで得たことは通常学級でも活かせるはずである。単に教科を教えるのではなく、教科を通じて、生徒がどのような力を身につけさせるか。その力こそ、生徒に必要なものであり、生涯にわたって生きてくるのではないかと思っている。

おわりに

本年度は教職課程常設分科会としての初めての発表であった。パネリストと参加した学生諸君の間に有意義な交流があったことは非常に大きな成果であったといえるだろう。

昨今、教育現場や教員養成制度について、様々な批判がなされ、次々と「改革」のための案や施策が打ち出されているが、学校と教育会と教職課程が本当の意味で相互に研鑽し合えるような場を持つことこそが、学校教育のよさを守り、それをさらに伸ばしていくことにつながるのではないかと思う。

そして、このような分科会を今後も継続して企画・実施することが、教職課程としての今後の課題といえるだろう。